

6.4.3 F 統計量と決定係数との関係

今まで通り，重回帰モデル

$$Y_i = \beta_1 X_{1i} + \beta_2 X_{2i} + \cdots + \beta_k X_{ki} + u_i$$

において，パラメータ $\beta_1, \beta_2, \dots, \beta_k$ に何らかの制約の検定を行う。

制約の数を G 個とする。

全く制約の無い場合に得られた残差を \hat{u}_i とする。

制約を含めて推定されたときの残差を \tilde{u}_i とする。

制約なし回帰式からの決定係数 \hat{R}^2 を,

$$\hat{R}^2 = 1 - \frac{\sum_{i=1}^n \hat{u}_i^2}{\sum_{i=1}^n (Y_i - \bar{Y})^2}$$

制約付き回帰式からの決定係数 \tilde{R}^2 を,

$$\tilde{R}^2 = 1 - \frac{\sum_{i=1}^n \tilde{u}_i^2}{\sum_{i=1}^n (Y_i - \bar{Y})^2}$$

とする。

このとき,

$$\frac{(\sum \tilde{u}_i^2 - \sum \hat{u}_i^2)/G}{\sum \hat{u}_i^2/(n-k)} = \frac{\left(\frac{\sum \tilde{u}_i^2}{\sum (Y_i - \bar{Y})^2} - \frac{\sum \hat{u}_i^2}{\sum (Y_i - \bar{Y})^2} \right) / G}{\left(\frac{\sum \hat{u}_i^2}{\sum (Y_i - \bar{Y})^2} \right) / (n-k)}$$

$$= \frac{((1 - \tilde{R}^2) - (1 - \hat{R}^2))/G}{(1 - \hat{R}^2)/(n - k)} = \frac{(\hat{R}^2 - \tilde{R}^2)/G}{(1 - \hat{R}^2)/(n - k)} \sim F(G, n - k)$$

となる。

1 つ目の等式では、分子・分母を $\sum(Y_i - \bar{Y})^2$ で割っている。

2 つ目の等式では、分子・分母を決定係数を用いて書き直している。

2 つの回帰式からの決定係数を使って、線形制約の検定を行うことができる。

数値例 1：「6.1.1 節 異常値ダミー」 今までの数値例を用いる。

$$Y_i = \mathbf{0.5} + \mathbf{0.7} X_i,$$

(0.398) (1.849)

$$R^2 = 0.5326, \quad \bar{R}^2 = 0.3768, \quad s^2 = 1.197^2$$

$$Y_i = \mathbf{0.9} + \mathbf{0.7} X_i - \mathbf{2.0} D_i,$$

(1.132) (2.985) (2.412)

$$R^2 = 0.8804, \quad \bar{R}^2 = 0.7609, \quad s^2 = 0.742^2$$

となる。ただし、係数の推定値の下の括弧内は t 値を表すものとする。 $i = 3$ のとき $D_i = 1$,
その他は $D_i = 0$ である。

回帰式： $Y_i = \alpha + \gamma D_i + \beta X_i + u_i$ について，

帰無仮説 $H_0 : \gamma = 0$

対立仮説 $H_1 : \gamma \neq 0$

D_i の係数 γ の有意性検定を F 分布を用いて行う。

$n = 5$, R^2 から，

$$\widetilde{R}^2 = 0.5326, \quad \hat{R}^2 = 0.8804$$

である。 $G = 1$ を代入して，

$$\frac{(\hat{R}^2 - \widetilde{R}^2)/G}{(1 - \hat{R}^2)/(n - k)} = \frac{(0.8804 - 0.5326)/1}{(1 - 0.8804)/(5 - 3)} = 5.82$$

と $F_{0.05}(1, 2) = 18.5$ を比較する (教科書『計量経済学』p.354の表4参照)。

5.82 < 18.5 なので, 帰無仮説 $H_0: \gamma = 0$ は採択される。

$$\sqrt{5.82} = 2.412 \implies t \text{ 値と同じ}$$

数値例 2: 「6.1.2節 構造変化ダミー」 「6.1.2節 構造変化ダミー」の数値例を用いる。

$$Y_i = \mathbf{0.211} + \mathbf{1.010} X_i$$

(0.427) (8.784)

$$R^2 = 0.8108, \quad \bar{R}^2 = 0.8003, \quad s^2 = 0.9928^2$$

$$Y_i = \mathbf{0.000} + \mathbf{1.000} X_i + \mathbf{3.370} D_i - \mathbf{0.543} D_i X_i,$$

$$(\mathbf{0.000}) \quad (\mathbf{2.715}) \quad (\mathbf{2.101}) \quad (\mathbf{1.214})$$

$$R^2 = 0.8612, \quad \bar{R}^2 = 0.8351, \quad s^2 = 0.9021^2$$

となる。ただし，係数の推定値の下の括弧内は t 値を表すものとする。 $i = 1, 2, \dots, 9$ のとき $D_i = 0$ ，その他は $D_i = 1$ である。

回帰式： $Y_i = \alpha + \delta D_i + \beta X_i + \gamma D_i X_i + u_i$ について，

帰無仮説 $H_0 : \delta = \gamma = 0$

対立仮説 $H_1 : \delta \neq 0$ ，または， $\gamma \neq 0$

D_i と D_iX_i の係数 δ, γ の有意性の同時検定を F 分布を用いて行う。

$n = 20, R^2$ から,

$$\widetilde{R}^2 = 0.8108, \quad \hat{R}^2 = 0.8612$$

である。 $G = 2$ を代入して,

$$\frac{(\hat{R}^2 - \widetilde{R}^2)/G}{(1 - \hat{R}^2)/(n - k)} = \frac{(0.8612 - 0.8108)/2}{(1 - 0.8612)/(20 - 4)} = 2.90$$

と $F_{0.05}(2, 16) = 3.63$ を比較する (教科書『計量経済学』p.354の表4参照)。

2.90 < 3.63 なので, 帰無仮説 $H_0: \delta = \gamma = 0$ は採択される。

数値例 3：「6.1.3 節 季節ダミー」 「6.1.3 節 季節ダミー」の数値例を用いる。

$$Y_i = - \mathbf{0.8094} + \mathbf{0.5200} X_i$$

(0.805) (5.002)

$$R^2 = 0.3971, \quad \bar{R}^2 = 0.3812, \quad s^2 = 2.2882^2$$

$$Y_i = - \mathbf{0.2784} - \mathbf{2.9145} D_{1i} - \mathbf{4.6697} D_{2i} - \mathbf{7.0951} D_{3i} + \mathbf{1.0474} X_i$$

(0.426) (4.402) (6.393) (8.262) (11.825)

$$R^2 = 0.7998, \quad \bar{R}^2 = 0.7769, \quad s^2 = 1.3739^2$$

となる。ただし，係数の推定値の下の括弧内は t 値を表すものとする。

回帰式： $Y_i = \alpha + \alpha_1 D_{1i} + \alpha_2 D_{2i} + \alpha_3 D_{3i} + \beta X_i + u_i$ について，

帰無仮説 H_0 ：定数項が一定 $\implies \alpha_1 = \alpha_2 = \alpha_3 = 0$ の検定ではない

対立仮説 H_1 ：定数項が季節に依存

$n = 20$ ， R^2 から，

$$\widetilde{R}^2 = 0.3971, \quad \hat{R}^2 = 0.7998$$

である。 $G = 3$ を代入して，

$$\frac{(\hat{R}^2 - \widetilde{R}^2)/G}{(1 - \hat{R}^2)/(n - k)} = \frac{(0.7998 - 0.3971)/3}{(1 - 0.7998)/(40 - 5)} = 23.47$$

と $F_{0.05}(3, 35) = 2.88$ (2.92 と 2.84 の間) を比較する (教科書『計量経済学』p.354の表4参照)。

23.47 > 2.88 なので H_0 を棄却する，すなわち，定数項は季節に依存する。

数値例 4：定数項を除いて，説明変数の係数がすべてゼロとなる検定：「6.1.2 節 構造変化ダミー」の数値例を用いる。

$$Y_i = \mathbf{0.000} + \mathbf{1.000} X_i + \mathbf{3.370} D_i - \mathbf{0.543} D_i X_i,$$

(0.000) (2.715) (2.101) (1.214)

$$R^2 = 0.8612, \quad \bar{R}^2 = 0.8351, \quad s^2 = 0.9021^2$$

となる。ただし，係数の推定値の下の括弧内は t 値を表すものとする。 $i = 1, 2, \dots, 9$ のとき $D_i = 0$ ，その他は $D_i = 1$ である。

回帰式： $Y_i = \alpha + \delta D_i + \beta X_i + \gamma D_i X_i + u_i$ について，

帰無仮説 $H_0 : \delta = \beta = \gamma = 0$

対立仮説 $H_1 : \delta \neq 0$ ，または， $\beta \neq 0$ ，または， $\gamma \neq 0$

$n = 20$ ， R^2 から，

$$\widetilde{R}^2 = 0, \quad \hat{R}^2 = 0.8612$$

である。 $G = 3$ を代入して，

$$\frac{(\hat{R}^2 - \widetilde{R}^2)/G}{(1 - \hat{R}^2)/(n - k)} = \frac{\hat{R}^2/G}{(1 - \hat{R}^2)/(n - k)} = \frac{0.8612/3}{(1 - 0.8612)/(20 - 4)} = 33.1$$

と $F_{0.05}(3, 16) = 3.24$ を比較する（教科書『計量経済学』p.354の表4参照）。

33.1 > 3.24 なので，説明変数の係数が全部ゼロという帰無仮説は棄却される。

6.5 Excel 2019 による回帰分析

(「6.1.3 季節ダミー」を例に取って)

左の A 列～F 列が数値例

C 列～F 列は季節ダミー

d1 は第一四半期に 1, それ以外 0 (C 列)

d2 は第二四半期に 1, それ以外 0 (D 列)

d3 は第三四半期に 1, それ以外 0 (E 列)

d4 は第四四半期に 1, それ以外 0 (F 列)

推定式は,

$$Y_i = \alpha + \beta X_i + u_i \quad \leftarrow \text{ダミーなし}$$

$$Y_i = \alpha + \beta X_i + \alpha_1 d1_i + \alpha_2 d2_i + \alpha_3 d3_i + u_i \quad \leftarrow \text{季節ダミー付き}$$

の二つ。

	A	B	C	D	E	F
1	y	x	d1	d2	d3	d4
2	1	3.510417	1	0	0	0
3	1	6.345513	0	1	0	0
4	1	10.522048	0	0	1	0
5	1	2.477398	0	0	0	1
6	2	5.649333	1	0	0	0
7	2	8.300705	0	1	0	0
8	2	10.027703	0	0	1	0
9	2	2.520644	0	0	0	1
10	3	5.179950	1	0	0	0
11	3	6.359450	0	1	0	0
12	3	10.978387	0	0	1	0
13	3	3.825372	0	0	0	1
14	4	5.889375	1	0	0	0
15	4	7.374288	0	1	0	0
16	4	12.137841	0	0	1	0
17	4	4.470294	0	0	0	1
18	5	9.154872	1	0	0	0
19	5	8.232540	0	1	0	0
20	5	9.751812	0	0	1	0
21	5	4.219973	0	0	0	1
22	6	10.100314	1	0	0	0
23	6	12.016091	0	1	0	0
24	6	12.965069	0	0	1	0
25	6	6.064354	0	0	0	1
26	7	9.866475	1	0	0	0
27	7	12.749116	0	1	0	0
28	7	14.612295	0	0	1	0
29	7	7.606418	0	0	0	1
30	8	11.297148	1	0	0	0
31	8	12.031481	0	1	0	0
32	8	11.969883	0	0	1	0
33	8	7.638043	0	0	0	1
34	9	11.687142	1	0	0	0
35	9	14.194724	0	1	0	0
36	9	14.284577	0	0	1	0
37	9	8.533405	0	0	0	1
38	10	10.663011	1	0	0	0
39	10	12.152527	0	1	0	0
40	10	15.663455	0	0	1	0
41	10	7.814745	0	0	0	1

(1) $Y_i = \alpha + \beta X_i + u_i$ ← ダミーなし

回帰統計							
重相関 R	0.63013						
重決定 R2	0.397064						
補正 R2	0.381197						
標準誤差	2.288237						
観測数	40						
分散分析表							
	自由度	変動	分散	割られた分散	有意 F		
回帰	1	131.031	131.031	25.02489	1.32E-05		
残差	38	198.969	5.236026				
合計	39	330					
係数	標準誤差	t	P-値	下限 95%	上限 95%	下限 95.0%	上限 95.0%
切片	0.809394	1.005036	0.805339	0.425635	-1.22519	2.843982	-1.22519 2.843982
x	0.519968	0.103942	5.002489	1.32E-05	0.309549	0.730387	0.309549 0.730387

重相関 R 0.63013 → \hat{Y}_i と Y_i との相関係数

重決定 R2 0.397064 → 決定係数 (= \hat{Y}_i と Y_i との相関係数の二乗)

補正 R2 0.381197 → 自由度修正済み決定係数

標準誤差 2.288237 → 回帰式の標準誤差 s

観測数 40 → 標本数 (データ数) n

回帰 1 131.031 → $\sum(\hat{Y}_i - \bar{Y})^2$

残差 38 198.969 → $\sum \hat{u}_i^2$

残差	38	198.969	5.236026
----	----	---------	----------

$$\rightarrow \frac{1}{n-k} \sum \hat{u}_i^2 = s^2$$

合計	39	330
----	----	-----

$$\rightarrow \sum (Y_i - \bar{Y})^2$$

	係数
切片	0.809394
x	0.519968

→ 推定値（上段は $\hat{\alpha}$, 下段は $\hat{\beta}$ ）

標準誤差
1.005036
0.103942

→ 各係数の標準誤差（上段は $s_{\hat{\alpha}}$, 下段は $s_{\hat{\beta}}$ ）

t
0.805339
5.002489

→ t 値 (上段は $H_0: \alpha = 0$, 下段は $H_0: \beta = 0$ の検定)

下限 95%	上限 95%	下限 95.0%	上限 95.0%
-1.22519	2.843982	-1.22519	2.843982
0.309549	0.730387	0.309549	0.730387

→ 右 2 列 : 95%信頼区間 (上段は α , 下段は β の信頼区間),

左 2 列 : 95%信頼区間 (99%信頼区間などに変更可)

25.02489

→ $\frac{131.031/1}{198.969/38}$

定数項を除く回帰係数がすべてゼロという仮説の検定

(2) $Y_i = \alpha + \beta X_i + \alpha_1 d1_i + \alpha_2 d2_i + \alpha_3 d3_i + u_i$ ← 季節ダミー付き

回帰統計								
重相関 R	0.894315							
重決定 R2	0.799799							
補正 R2	0.776918							
標準誤差	1.373904							
観測数	40							
分散分析表								
	自由度	変動	分散	割られた分散	有意 F			
回帰	4	263.9336	65.98339	34.956	8.95E-12			
残差	35	66.06645	1.887613					
合計	39	330						
	係数	標準誤差	t	P-値	下限 95%	上限 95%	下限 95.0%	上限 95.0%
切片	-0.27837	0.653879	-0.42571	0.672922	-1.60581	1.04908	-1.60581	1.04908
x	1.047362	0.088574	11.82472	8.87E-14	0.867548	1.227177	0.867548	1.227177
d1	-2.91454	0.662023	-4.40247	9.6E-05	-4.25851	-1.57056	-4.25851	-1.57056
d2	-4.66975	0.730397	-6.39344	2.35E-07	-6.15253	-3.18696	-6.15253	-3.18696
d3	-7.09509	0.858806	-8.26157	9.74E-10	-8.83856	-5.35162	-8.83856	-5.35162

● 緑色の 34.956 は、定数項を除くすべての回帰係数がゼロという仮説 ($\beta = \alpha_1 = \alpha_2 = \alpha_3 = 0$) の検定統

計値で、
$$\frac{263.9336/4}{66.06645/35} = \frac{65.98339}{1.887613} = 34.956$$

この値と、 $F_{0.05}(4, 35) = 2.65$ (2.69 と 2.61 の間) を比較する。

34.956 > 2.65 なので、定数項を除くすべての回帰係数がゼロという仮説 ($\beta = \alpha_1 = \alpha_2 = \alpha_3 = 0$) は棄却される。

● 季節性があるかどうか ($d1_i, d2_i, d3_i$ を含めるかどうか) の検定： (1)式と(2)式の比較

(1)式は制約付き回帰式：
$$\sum \tilde{u}_i^2 = 198.696, \tilde{R}^2 = 0.397064$$

(2)式は制約なし回帰式：
$$\sum \hat{u}_i^2 = 66.06645, \hat{R}^2 = 0.799799$$

残差平方和を用いて、
$$\frac{(\sum \tilde{u}_i^2 - \sum \hat{u}_i^2)/G}{\sum \hat{u}_i^2/(n-k)} = \frac{(198.696 - 66.06645)/3}{66.06645/35} = 23.47$$

決定係数を用いて、
$$\frac{(\hat{R}^2 - \tilde{R}^2)/G}{(1 - \hat{R}^2)/(n-k)} = \frac{(0.799799 - 0.397064)/3}{(1 - 0.799799)/35} = 23.47$$

この数値と $F_{0.05}(3, 35) = 2.88$ (2.92 と 2.84 の間)

23.47 > 2.88 なので、季節ダミーは必要と結論づける。(2通りの方法)

ついでに,

$$Y_i = \alpha + \beta X_i + \alpha_1 d1_i + \alpha_2 d2_i + \alpha_3 d3_i + \alpha_4 d4_i + u_i \quad \leftarrow \text{季節ダミー} - 4 \text{ つ付き}$$

下記の計算結果が得られる。

回帰統計								
重相関 R	0.894315							
重決定 R2	0.799799							
補正 R2	0.748347							
標準誤差	1.373904							
観測数	40							
分散分析表								
	自由度	変動	分散	割された分散	有意 F			
回帰	5	263.9336	52.78671	34.956	1.82E-12			
残差	35	66.06645	1.887613					
合計	40	330						
	係数	標準誤差	t	P-値	下限 95%	上限 95%	下限 95.0%	上限 95.0%
切片	-7.37345	1.17218	-6.29037	3.21E-07	-9.75311	-4.9938	-9.75311	-4.9938
x	1.047362	0.088574	11.82472	8.87E-14	0.867548	1.227177	0.867548	1.227177
d1	4.18055	0.708883	5.897375	1.05E-06	2.741441	5.61966	2.741441	5.61966
d2	2.425339	0.647759	3.7442	0.00065	1.110318	3.740359	1.110318	3.740359
d3	0	0	65535	#NUM!	0	0	0	0
d4	7.095087	0.858806	8.261567	#NUM!	5.351617	8.838556	5.351617	8.838556